

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770150

研究課題名(和文) 親密度とスピーチレベルの運用に関する日韓対照研究：親密度測定尺度の構築とその検証

研究課題名(英文) A contrastive study of closeness and operative speech level in the Japanese and Korean languages: Construction and verification of a closeness measurement scale

研究代表者

金 アラン (KIM, Ahran)

上智大学・言語教育研究センター・助教

研究者番号：90711135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語学分野に会話参加者の親密度を測定できる尺度が存在しないことに着目し、社会心理学のRCI(Relationship Closeness Inventory)を言語学分野で使用可能かどうかを検証した。RCIが1980年代のモデルであるため、SNSの利用状況など、新しい項目を追加してアンケートを行なった。日本語と韓国語を対象とするため、調査は両国で実施した。文化の違いが親密度の判断に影響を与える可能性があると考え、インタビュー調査も行なった。また、親密度によってスピーチレベルの選択や談話ストラテジーが変わるかどうかを確認するために、談話分析も行なった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused upon the lack of a scale in the field of linguistics for measuring the closeness of conversation participants, and examined whether the RCI (Relationship Closeness Inventory) used in social psychology may be adopted. RCI is a model developed in the 1980s, so we conducted a survey adding new items such as the state of SNS usage. We used the Japanese and Korean languages as subjects, and thus conducted the survey in both of those countries. We felt that cultural differences may influence determination of closeness, and conducted interview surveys accordingly. In addition, we also conducted a discourse analysis in order to check whether speech level selection and discourse strategies changed depending upon closeness.

研究分野：日韓対照言語学

キーワード：日韓対照言語学 親密度 待遇法 スピーチレベル 談話ストラテジー RCI

1. 研究開始当初の背景

日本語と韓国語のスピーチレベルは、年齢のような縦の関係や親密度のような横の関係によって運用される。特に親密度がスピーチレベルの運用に大きな影響を与えており、年齢がかなり離れていても親密度が高ければ非丁寧体の使用が許される。しかし、スピーチレベルの運用に関するこれまでの日韓対照研究(金珍娥 2002, 申媛善 2007, 李恩美 2008)を見てみると、初対面同士の会話をデータとしており、親密度がスピーチレベルの運用に具体的にどのような影響を与えているのかについては明らかになっていない。そこには、会話参加者の年齢は統制できる客観的な要因であるのに対し、親密度は主観的な指標であるため、統制が難しいという問題が存在する。

報告者は 2008 年から日韓語のスピーチレベルの運用に関する研究を行なってきたおり、年齢や性別のような社会的パラメータと文の種類や文の機能のような文法的パラメータがスピーチレベルの使い分けに影響を与えていることを明らかにした。そして、スピーチレベルと親密度の関係を明らかにすべく、日本人と韓国人を対象とし、親しさの判断基準についてアンケート調査(ケーススタディ)を行なった。その結果、「どれくらい頻繁に会っているか」、「何でも話せるか」など様々な回答が得られたが、その内容は社会心理学の「RCI(Relationship Closeness Inventory)」と共通する点が多かった。Berscheid et al.(1989)によって提案された RCI は、一緒に過ごす時間(頻度)、一緒に行なう活動領域の数(行動の多様性)、お互いの日常的な行動・決定・計画・目標に影響を与える程度(影響の強さ)を親密度の基準としている。

そこで本研究では、言語学分野で会話参加者の親密度を測定する際に、社会心理学の RCI が利用できるかどうかを検証することにした。また、相手に対する親密度によってスピーチレベルの選択や談話ストラテジーがどのように変わるかについても明らかにすることにした。

2. 研究の目的

本研究では以下の 3 つの課題を立てて研究に取りかかった。

(1) 日韓語で親密度の判断基準に違いが見られるかどうか明らかにする。

日本語はウチ・ソトの概念を重視する言語で、韓国語は年齢を中心とした上下関係を重視する言語とされる。また、《領域》に対する意識(鈴木 1997)が日韓語で異なり、日本語では聞き手の領域に踏み込む言動が失礼とされる場合が多いが、韓国語では聞き手の領域に踏み込むことこそ相手への興味を表す行為とされる(許明子 2010)。文献調査やアンケート、インタビュー調査を行ない、日

韓語における親密度の判断基準を明らかにする。

(2) RCI を現在の実情に合わせて修正し、言語学分野で使えるかどうかを検討する。

RCI が 1980 年代に発表されたモデルであるため、時代の変化を反映した修正が必要である。谷口(2004)が携帯電話の普及による連絡の取り方の変化を反映して RCI の修正を行なったことがあるが、その後、スマートフォンの普及により、連絡の取り方がさらに変化し、コミュニケーションの取り方も変わった。コミュニケーションの取り方の変化が親密度の形成にも変化をもたらしている可能性を考えて、RCI の修正を行なう。修正した RCI でアンケートを行ない、RCI が言語学分野で使えるかどうかを検討する。

(3) 相手に対する親密度によってスピーチレベルの選択や談話ストラテジーがどのように変わるかについて明らかにする。

発話の丁寧さは、敬体と常体に二分される文末形態や、「ね」や「よ」のように様態を表す終助詞と共起しているかどうか等によって判断される(三牧 1993, 佐藤・福島 2000)。また、相手に対する親密度によって使用が許される語彙にも違いが見られる。さらに、相手と意見が一致しない時、素直に自分の意見を言えるかどうか、言えるとしたら直接的に言うか間接的に言うかは、やはり親密度によって異なると考える。本研究では、自然会話をデータとし、親密度によって、スピーチレベルの選択や談話の展開方法などがどのように変わるかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) インタビュー

日韓語で親密度の判断基準に違いが見られるかどうかを明らかにするために、現在日本で留学している韓国人留学生と、韓国で留学したことのある日本人を対象にインタビューを行なった。対人関係における両文化の類似点と相違点について質問し、親しさの判断基準を話してもらった。また、RCI の項目の一部を取り上げ、現在最も仲の良い友人との関係についても話してもらった。

(2) RCI の修正とアンケートの実施

先行研究やインタビュー結果を参考に RCI の修正を行なった。SNS の利用状況に関する質問や、不満の表し方など日韓語で違いが顕著に見られると言われているいくつかの言語行動に関する質問も追加した。また、親密度だけでなく、共感度も設問項目に入れた。アンケートは、日本と韓国の大学生を対象に行なった。

(3) 自然会話

基準者を 1 人決め、その基準者に親密度の異なる相手を 2-3 名連れてきてもらった。録

音の前に、協力者らには 20 個のテーマが書かれたシートを渡し、自分の意見に○をつけてもらった。テーマは、「死刑制度：賛成・反対」のような重いテーマから、「夏休みに行くなら：海・山」のような軽いテーマまで多様に提示した。基準者と会話相手には、「意見が一致するテーマ」と「意見が一致しないテーマ」の中から話が盛り上がりそうなテーマをそれぞれ 1~2 個選んでもらった。録音は 1 対 1 で行ない、録音時間は 20~25 分とした。録音したデータは、書き起こし作業を通して文字化し、分析を行なった。

4. 研究成果

(1) インタビュー

親密度の基準が日本と韓国で異なる可能性があるため、韓国で留学した経験がある日本人(13名)と、現在日本で留学している韓国人(12名)を対象に日韓の対人関係に関するインタビューを行なった。以下にその結果をまとめて示す。

日本人留学生は比較的短期間で韓国人と仲良くなるケースが多かったが、韓国人留学生が日本人と仲良くなるまでは、注意しなければならない点(例:対人距離、誘い方)が多く、かなり時間がかかるという応答が多数得られた。

先行研究(任・井出 2004, 洪 2007)が指摘した通り、日本人は「親しき仲にも礼儀あり」と考える人が多かったが、韓国人は「親しき仲には礼儀なし」と考える人が多かった。特に、韓国人は「時間を気にせず、夜中にも相手に連絡できるかどうか」を親しさの基準としている人が多かった。

これまで両文化のコミュニケーション・スタイルについて、日本人は間接的、韓国人は直接的と言われてきたが、どういう言語行動であるかによって違いが見られるかが分かった。まず、韓国人は断る時や不満を言う時は直接的な言い方を好んでいるが、お礼を言う時や謝る時は「やはりあんたしかいない」、「待たせたからご飯は私が奢るね」のように嬉しい気持ちや申し訳ない気持ちは間接的に表していることが分かった。一方、日本人は間接的な断り方を好み、不満表明に関しても言わない、もしくは言うとしても間接的に言う人が多いが、お礼を言う時や謝る時は事柄の大小に関係なく、「ありがとう」「ごめん」という言葉を使って気持ちを直接的に表しているという意見が多かった。日韓のこのような違いにより、お互い、韓国人は無礼な人、日本人はなかなか距離を縮め難い人という印象を抱いていることが分かった。

以上に示したように、日本人と韓国人は対人関係や親密度において違いを多く見せていた。

(2) アンケート

先行研究やインタビュー結果に基づいて、RCIの修正を行なった後、日本の大学生と韓国の大学生を対象に親密度に関するアンケートを行なった。日本では計 98 部(男性: 25 部, 女性: 73 部)、韓国では計 189 部(男性: 64 部, 女性: 125 部)回収できた。男性のデータが少ないため、以下では女性のデータを中心に結果を述べる。

SNS の利用状況について

まず、SNS 利用者は、韓国(88%)より日本(100%)の方が高かった。利用している主な SNS の種類と各 SNS の利用者率を確認した結果、日本は「LINE(100%) > Twitter(89%) > Face Book(84.9%) > Instagram(76.7%)」で、韓国は「kakao talk(89.6%) > Face Book(72.2%) > Instagram(42.6%) > Twitter(20.9%)」であった。また、SNS の利用目的については、日韓ともに「友達とのコミュニケーション」が第 1 位であった。次に SNS が自分の対人関係にどの程度影響を与えているか「1~7」から選ばせた結果、日本は「6」が 39.7%で最も高く、「5」が 23.3%で 2 位、「7」が 13.6%で 3 位であった。一方、韓国は「5」が 38.0%で最も高く、「6」が 25.9%で 2 位、「4」が 11.1%で 3 位であった。全体的に韓国より日本の大学生の方が SNS の利用率が高く、対人関係に影響をより多く受けていることが分かった。「SNS による対人関係で不快な思いをしたことがあるか」という質問に対しては、日本は 63%の人が、韓国は 59%の人が「ある」と答えた。

最も親しい友達との交友関係について

結論から言うと日韓とも、一緒に過ごす時間(頻度)、一緒に行なう活動領域の数(行動の多様性)、お互いの日常的な行動・決定・計画・目標に影響を与える程度(影響の強さ)は、親密度にある程度までは影響を与えているが、
が高いからといって必ずしも親密度が高いわけではないことが分かった。SNS の普及により、それほど頻繁に会えなくても、SNS を通していつでもどこでも友達とコミュニケーションが取れるようになったことが一番大きい要因と考えられる。また、一緒に行なう活動の数や話題の数も親密度とそれほど密接な関係は見せなかった。例えば、一緒に行なう活動が一つしかなくてもそれがその相手としかできない場合は、行動数が一つでも親密度が高かった。また、親密度が高くて相手の言動にそれほど影響を受けていないことが分かった。最も親しい友達について答えてもらったにもかかわらず、相手が自分の生活や考え方などにどの程度影響を与えるか聞いたところ、「1~7」のうち、「中」に該当する「4」以下が、日本だと約 50%、韓国では 45%であった。最も興味深い結果は、相手に対する親密度を見てみると、

日本は「7」が 50.7%、「6」が 24.7%、「5」が 20.5%で、「4」、「3」、「2」に○をつけた人(それぞれ 1 名)もいた。韓国は「6」に○をつけた人が 46.4%で最も多く、「7」が 38.4%、「5」が 9.6%でその後に続いた。日韓ともに、最も親しいと思う友人にさえ、親密度が最高値でないと感じた人が 50%以上であることが明らかになった。

アンケートには、「相手に不満があった場合言えるか」や「時間を気にせず、深夜でも相手に連絡できるか」という質問も追加した。その結果、前者に関して、日本人の 32.9%、韓国人の 11.2%が「言えない」と答え、後者に関しては、日本人の 30.1%、韓国人の 21.6%が「しない」と答えた。日本でも親密度が高ければ不満を言い、遠慮をしないという結果を見せている一方、韓国人の中にも親しくても不満を言えない、遠慮をする人が意外と多いということを示していると言える。友人のあり方やコミュニケーションの取り方の変化により、日本でも韓国でも対人関係において変化が見られていると考えられる。

以上の結果から、RCI が提案された 1980 年代にはオフラインでのコミュニケーションが主であったが、近年スマートフォンの普及によりオンラインでもコミュニケーションを取れるようになり、RCI だけで親密度を判断するには無理があると考えられる。

(3) 談話分析

基準者を一人決め、その基準者に親密度の異なる相手と、意見が一致するテーマ(10 分)と、意見が一致しないテーマ(10 分)について話し合ってもらった結果、以下のことが明らかになった(日本語 6 組、韓国語 5 組)。

日韓ともに、親密度が「高」の相手には、不同意を直接的に表していたが、「中」や「低」の相手には相手の意見に部分的に同意を表しながら、自分の意見を控えめに述べていた。特に日本語では、親密度が「低」の相手に対して、自分の意見を曲げて相手の意見に同意する形で会話を終わらせる場合も見られた。しかし、韓国語では相手の意見に部分的に同意はしても自分の意見を曲げる人は基本的にいなかった。

日韓語ともに、意見が一致しないテーマについて話す時、非丁寧体から丁寧体へのアップシフトが見られた(例:そんなに甘くないですよ)。これは、心的距離を確保しつつ、ふざけているような雰囲気を作り出し、会話が気まづくならないようにするための談話ストラテジーの一種だと考えられる。

本研究では、社会心理学の研究成果を言語学の研究に用いることができないかを検証したもので、新しい試みとして意義があると

言える。コミュニケーションの取り方や対人関係のあり方の変化により、RCI だけで親密度を判断するのは難しいという結果となったが、具体的にどのような項目で変化が著しく見られているか検証できたため、その結果を今後の研究に活かしたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

金アラン(2017)「非丁寧体の会話におけるアップシフトに関する日韓対照研究」『日本文化学報』53 号, p.87~p.112, 査読有 (<https://DOI.org/10.21481/jbunka..72.201702.87>.)

〔学会発表〕(計 5 件)

金アラン「アンケートから見る日本人大学生の親密度に関する一考察」韓国日本文化学会第 52 回国際学術大会, 2017.04.15, 全北大学校・全州(韓国)

金アラン「韓国留学を経験した日本人大学生のインタビューから見る韓国の言語文化と韓国語教育のこれからの課題」日本韓国語教育学会第 7 回学術大会, 2016.10.29, 近畿大学(大阪府・東大阪市)

金アラン「日本人大学生の意見不一致場面に現れる談話ストラテジーに関する一考察」韓国日本文化学会第 51 回学術大会, 2016.10.22, 忠南大学校・大田(韓国)

金アラン「韓国人留学生から見た日本人の対人関係 - 日本の大学に在学中の韓国人留学生のインタビューを通して - 」韓国日語学会 2016 年夏季国際学術大会, 2016.06.18, ハンバツ大学校・大田(韓国)

金アラン「現代韓国語における ‘-a/e tulita(~てさしあげる)’に関する一考察 - 利益・不利益の観点から - 」第 35 回社会言語科学会, 2015.03.15, 日本女子大学(東京都・文京区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 アラン (KIM, Ahran)

上智大学・言語教育研究センター・助教
研究者番号: 90711135